

春城雜纂

十五

新得新聞改良意見  
條約及正建議案

特別

14

1919

684

新潟新聞社ノ沿革ニ関スル意見ヲ陳スルノ書

第一 大體ノ觀察

新潟新聞社ハ創立以後既に十年ニ垂ルベシ其ノ發刊ノ新報紙現ニ三千餘  
号ニ及リ實ニ地方ニ類スレキノ大新聞社ナリ然リ而シテ其ノ實名聲  
甚ク外ニ顯ハレズ其ノ紙數著シク増加セザル者ハ蓋シ種々ノ原因ニ由  
リトモ之ヲ大畧ニテ左ノ數原因ニ歸セザルヲ得ザル哉ニ思考仕候

第一 日新社ト競争スルノ法其宜シキヲ得ズ

第二 主筆記者ノ更迭甚ク頻繁ナリ

第三 主筆記者ノ格力甚ク少ナシ

第四 主筆記者と株主役員との離隔

第五 陰入新報社との関係外見上明カナラザル

第六 事務の取扱後所凡ク備フ

第七 社中ノ内幕事情実ノ関係甚ク多クシ

第八 冗費多クシテ事務ノ溢満ヲ生ス

以上ノ諸原因ハ概内部ノ認識ニ関シ直接ニ外部ノ関係セズトモモ凡ク新聞事業ノ如キハ内部ノ整理ハ即チ外部ノ整理ト顯ルル者ナレバ皆ナレバ社業衰頹ノ原因ト為スヲ得ヘシ是ヲ今各項ニ就テ諒考ヲ願ヒス專見陳述可仕也

第一

該社新報は紙數ノ増減モ其發價ノ消長モ一日新報社と競争スルヲ得ルト否トニ関スルナレバ先ツ以テ兩社ノ比較ヲ為サル可ラス日新報社ハ該社比シテ資

本モ之レク機械其他印刷百般ノ要具皆備ハラズ故ニ現ニ金銀上ニ関スル信用甚ク薄シ然リ而シテ紙面上ニ於テ免モ角モ多ク、信州者も清上

信州者も清上

壓服スル能ハザル者ハ何ゾヤ蓋シ該社が子ブ能ハザル一種ノ事情アリテ

存スルニ由ルナリ即チ同社ノ主任記者ト共ニ起リ主任記者ハ同社ト表裏ヲ

共ニシタルノ特情コレナリ既ニ養老ヲ与ヒシタルノ関係アル以上ハ記者ハ同社ト表

スルノ心情モ一層深キ理合ナルヘキナリ該社ハ之ニ反シテ創立以來記者ヲ易クシ

テニ該社ハ之ヲ知ラズ同社ト表裏トシテ同社ヲ表トスルニ得

ベカラズ也日新報社が多少ノ信用ヲ得意ト有ルハ必竟斯ルノ関係ニ由ルトモ

モ少シ又記者ハ一ノ事業ニ得意ト年月ニ由リ生シタル親密ノ関係ノ

得タルニ由ラズトセンヤ蓋シ世間ニ漸ヤク交際ヲ廣ヒケタルニ由ラズトセンヤ蓋

シ世間新報ヲ購読スル者ハ株主若シハ社主ヲ信シテ之ヲ購フニアラズ記者

（主筆記者と株主役員との離隔）

ラ位レテ之ヲ購フナリ記者ニ名深多ク出来記者ニ紙面トノ交際廣カレハ其新  
中ハ後令内部ハ必都々ナルモ容易ニ斃レシヤ此点ニ就テ競争セズ徒ラ  
枝葉ヲノミ競争スルカ如キハ経験世故ニ長スル者ノ取ラサル所ナリ該  
社ハ諸般ノ点ニ就テ競争スルノ實カラ備フ而シテ此一点ニ於テ競争ス  
ヲ為サズ是レ本社裏類ノ一原因ナリ諸フ次項ニ就テ更テ之レヲ詳陳  
可ハカ

第ニ

五二年記者ノ更迭頻繁ナルハ腐ヲ去リ鮮ヲ取ルノ道ナルカ如シト云モ且レ學校  
教員採ニ就テ云フキコトニシテ新中記者採ニ云フ可キコトニアラズ新中記  
者ニ要スル所ノ者ハ熟練ト信用ニ在リ而シテ熟練ト信用ハ歲月ヲ積ム由  
リテ之ヲ致スノ外ナシ徒來新中社ノ為ストコトヲ見ルニ記者ノ地位ヲ保ツ長キ三  
年ニ出テス短カキハ一年ニ過キス其去來ノ頻繁ナル恐クハ他ニ比類ナカル

心ニ鳴呼如斯ニシテ何ニシテ熟練ト信用ノ増加スルヲ望マラレヤ熟練積ム  
時ハ是レ社ヲ去ルノ時ナリ信用出ルノ日ハコレ任ラ解クノ期ナリ而シテ竊ヤニ  
嘲ツテ向リ彼レハ任ニ堪ヘズ彼レハ事務ニ慣レズト生ニ刻ナラズヤ夫レ一社内  
ノ信用ノ如キハ一年ノ日トモ能ク之レヲ致スヲ得ベシト云モ外ニ對スル信用ノ  
如キハ一年ノ短日月能ク得テ收ムベキノニアラズ別ニテ他國出身ノ記者ノ如キ  
然レトス該社ノ記者ニ對スル關係如キガ故ニ聘ヲ受テテ來ル者ハ皆テ永存ノ  
覺悟アル者ナレ故ニ日新社ト競争スルノ心モ亦又自ラ薄ク内外ニ對スル大計  
ヲ立テタル者モ亦多ク是レ是レ然ルベキナリ記者更迭頻繁ナルハ必  
ラズ一時主義ヲ失ヒ他ニ慮ヲ窺ハシメ記者更迭頻繁ナルハ其都度得意ヲ  
増減シ記者更迭頻繁ナルハ論旨ヲ守リノ体又々變ス其他往復ノ旅費等ノ  
不経済又々辭ヲ可ラサルナリ諸ノ尚ホ更ラニ次項ニ就テ身見ヲ陳カ可シ

第ニ

主任記者ノ権力甚々微弱ナルハ實ニ其ノ運送ヲ頓挫ナラシムルノ原因ト云フニ  
該社ノ組織ニテハ社務百般重ク信託スルニ社長ナル者アリテ此等ノ権力ヲ以  
て是レ又々他ノ新聞社ニ多ク見サルノ特例ナリ案スルニ他處ノ新聞社ニテモ  
社長ナル者ナキニアラストモ多クハ全盤上ノ事務ヲ統理スルノ任ニテ即チ  
株主ヲ代表シテ社主タルノ地位ヲ占ムルニ過キス決シテ編輯事務ニテモ  
記者ハアラズ何モ然レバトモ思フ社友何ニトナシバ株主ヨリ出テタル人ハ  
世オニ長スルノハアラズ事務ニ老練ナル者ニラントモモトモ事ノ上ノ事ニ  
至リテハ故ラニ記者ト備ハレタル者ニ劣ルハ當然ノ事ナレバテ該社ノ福利ノ起  
可ハ直言スレバニ社長ノ権力過大ナルニ歸サレテ得テ不令積フハ實際ノ  
存様ヲ具サシ臆列セシテ記者ヲ束縛シ備ハレトス其人先ツ自家ノ権力ヲ固  
クハ無論ノ事ナリ而シテ皆ナ備ハレテ好マズ也ナシ其自家運送ノ區域ハ  
甚々窮屈ニシテ充分ノ働キヲ為スヲ得サレバナリ而シテ偶々來ル者アリテ

人々世間ノ信用ヲ求ムルノ望アラズ先ツ社長ニ信託シテ信ヲ得サル可ラズ且  
ニ爾カスルハ決シテ其人ノ劣情ヲ出ルニアラズ然カセバ向テ運動ヲ為ス能  
ハザリ不都合アリ何ヤ編輯局長負ハテ社長ノ任ヲ得ニテテ欲ス社長  
ハ即チ競争点ナリト云フベシコトヲ以テ記者ノ新々ニ來ルヤ社長先ツ旧社員ハ  
ニ其人物ノ向ヒ其ノ一舉一動ヲ向テ而シテ鏡口一タヒ乗ズレバ新任記者ノ運  
命ニ定ムル蓋シ旧社員ノ信用ハ新任記者ニ比スレバ自ラ深キ埋合ナレバナ  
リ新任記者タル者一方ニ社長ノ信ヲ博シ一方ニ社員ノ欲心ヲ収メサル可ラズ  
又々甚々多クナリト云ハサルヲ得ニヤ故ニ一社ノ信ヲ博スルノ人ハ世間ノ信ヲ  
博スルノ人ニアラズ一社ノ信ヲ博スル其人ノ地位鞏固ニシテ世間ノ信用意ハ  
地陸ツ蓋シ人向ノ性質トシテ豪氣ニ車直ク者ハ久シキヲ經テ世ノ信ヲ得ルトモ  
此性ハ細事ニ拘ラスル能ハサル者少ナカラハサリ談社ニ人ヲ得テ長ク其位  
地ヲ保タシメンニ據着ノ兩性質ヲ備セ備フノ人ヲ得サル可ラズ亦々難哉

記して社長ノ権力重キが故ニ他ノ社員トモ偏ヘニ信ヲ社長ニ得シテ且  
シ欲シ汲口トシテ是レ日モ是ラ不為メニ本務ヲ怠ルノ弊アリ是レ編集  
ニ関係アル社員ノ勉勵ヲ鼓舞セシニ編輯局長ニ憚ル所アリテ初テ  
為スヲ得ベシ然レニ編輯局長モ他ニ此レ若クハ憚ラレハ権力ヲ  
有セス社員ノ本務ヲ怠ルニ至ルハ現今ノ組織、然ラレハ此ナリと思テ)スルノ外  
無シ候

第四

主任記者ト役員株主ノ離隔ハ此ノ原因ナリ夫レ記者ハ自ら營業ノ衝ニ  
當ル者ナレバ紙面ノ改良其他ノ事ニ存テモ最モ體驗アルベキ筈ナリ又且早ク  
心付クキ筈ナリ而シテ役員株主ハ之レヲ実行スル者ナレハ兩者ノ關係ハ甚々  
親密ナラカハ得ザレト辨シ得ル者ニ被存者然レニ該社ノ組織ニテハ社長  
ハ株主ト他ノ社員トトシテ互チ兩者ノ事ヲ牽引ルカ故ニ主任記者カ他ノ役員

株主ニ對ルニ關係ハ甚々疎遠ニシテ會議ノ席ニモ傍聴スルヲ得ス但シ  
記者ノ意見ト是モ之ヲ陳ズルハ他モ多クシトモ是レトテモ社長ノ  
信用ヲ得ル上ノ一ニシテ社長ノ信用ヲ得ザレバ社務改革ノ考案其  
決議モ亦多ク得ス甚シキニ至リテハ一社ノ規則類ニテモ見ルヲ得ス  
要スルニ一社ノ盛衰ニ是モ痛痒ヲ感セシメルハ實際ナリ主任記者トモ  
是レ日給ツ賃ルカ為メニ之ヲ兼ル者ナラシヤモ數キ疎外ヲ恐ルハ是レ其  
ノ最モ痛心スル所ナラント被存候該社規則ニハ社長カ記者ヲ監督スル法  
ハ現時内ニ立テ居レ社長ヲ監督スルノ法ハ是モ立テ居ラズト云フベシ社長  
トモ是レ常ニ失ナシトセシヤ今日ノ規則ニテハ社長ノ一失ヲ見出ス能ハザル  
仕但ナリ社長ノ失ヲ知ラント欲セハ記者ノ役員株主ノ關係ヲ親密ナラシメザレ  
可ズ而シテ親密ニスルノ法ハ其ノ實際上ヨリ之レヲ求ムルガ如キ淺ク其  
手段ニ依ルベカラズ確トシテ之ヲ定メ置クノ緊要ノコト、被存候此等ノ尚ホ後

段ニ申ニ述フベシ

第五

行爲新事ト控入新事ハ其性質異ナルノ新事ナリ新事新事ハ其性質ニ  
大新事ノ体操ヲ執ルヤルヲ得ズ控入新事ハ寧ニ鄙猥ノ議ヲ受クルモ  
可成觀客ノ心ニ投セサル可ラズ去レハ内部ハ其實同一件ナルキハ勿論ナ  
候得共外部ニ對シテ極テ独立ノ体面ヲ執ル真ニ名獨立ノモノト示スル尤モ  
兩社ノ得策ト被存候左ナキ時ハ世人ノ記者ノ心裏張リ鄙猥ナラセト信シ甚  
キニ至リテハ控入新事ノ然ラ新事新事ニ嫁スル者アリ是レ又々新事新事  
ノ一ノ子利益ナリト被存候

第六

事務ノ取扱上テ又ノ弊ヲ生スルハ規模大ナル会社ノ免レサル所ニシテ該  
社ニ々漸ヤリ御後防風ニ傾キタルが如ク其害ニ對スルハ不潔切ナル其害切  
キ事ニ不巧者ナル到処人々之ヲ讀ム日新社ガ死ニモノ狂ヒニ周旋スル有様ト比  
較セハ世人ノ目ニハ如何ニモ斯ク見エヘシ然レ此只ニ世人ノ評判ノミニ非ズ其  
實真ニ然下被存候蓋シ高貴上ノ得計ニアラジト思考仕方

第七

第三項ニ述ベタル如ク権力ハニ社長ニ集マリ社長ハ社員ガ信用ヲ競フノ燃点  
ナレハ情愛ノ關係随ツテ起ラサレ得ヌコトヲ以テ某ハ信用アル社員某ノ  
推薦ニカレ被仰ナレト雖モ退ク可ラズ某ハ信用アル社員某ノ姻戚ナリ  
決シテ退社セシム可ラズトノ情弊ハ歴然トシテ起リタルヤノ世評ノ之アル由ニ尙  
キ又去レハ何事ヲ改革セントスルモ此ノ情弊ノ為ニ抑ヘラレ左支右吾断  
行スベカラサルヲ随分アリ勝ト被存候是レ又該社ノ一變ト申シタラ候

第八

第七項ニ述ヘタル事情ガ原因トナリテ社員ノ數ハ驚クニ夫レ多シ社員數

○下左ラ暇  
之ニ同視ニ女極務  
男子ニ部ノ事ヲ避ル  
ニ世人

ノ多キハ萬事ニ就テ利便ナルカ如シト雖モ不経論此上ナキノミナラズ又事  
務之混雜ヲ来シ或ハ他ヨリ到來シタル緊要ノ書札ニテ往々主務ノ人ニ  
傳セサルヲモ之レヤヤ聞ケリ編輯ノ當直ノ者互ニ勇ヲ辭シテ校正ヲ  
担ヒスル者モ之アル由ニ噂セリ其弊一ニ枚挙スルニ足ラザラサルベクト被  
存候

前記ノ八項ハ新馬新中ノ社ノ諸弊ニシテ孰シモ皆ナ除カニ矯正ヲ要スル  
所ノ者ナリ苟クモ之レヲ矯正セズシテ枝葉ノ改良ヲ計ル計略ヲ用ユルニ  
止マラバ只々日新社ヲ壓伏スル能ハサルノミナラス新馬新中ノ社ノ永存ニ亦  
々覺束ナシナドノ世評ヲ起サシムル哉モ計リ難ク候

第二 矯正考案

新馬新中ノ社ノ諸弊果ニテ第一歎ニ述フル如クニバ之ヲ矯正スルノ方安キモ亦  
々得難キニアラズ先ツ社長ノ職權ヲ変更スベシ規則第廿七条ニ依ルニ「社長  
ハ内外事務ヲ総理ス社負ノ進退懸涉又ハ職掌ヲ分課シ其給料ヲ定  
ムル等ハ凡テ取締ニ諮詢シテ法行スベシ」トアリ其職權其ノ々廣シ然レモ第一  
歎ニ據ル所ノ理由ニ據リ社長職權ノ幾少ヲ割テ之レヲ主任記者ニ移シ  
社長ノ職專ラ事務全般ノ事ニ向スルトシ又ノ編輯ニ向スル小局部ノ  
事ノ如クハ之レヲ主任記者ニ委スヘシ去レモ主任記者ハ其系トヨリ成規ノ  
如ク社長ニ懸附セラルハ勿論ノ義ト被存又々主任記者カ編輯員ヲ進退  
セントスルノ場合ニ於テハ無論其独断ニ委ス可ラス必ラス社長ト熟議シテ  
社長ニシテ法行スルトナスベシ但シ主任記者以下ノ編輯員ハ所謂關係  
ニ隔チサレバ之レヲシテ關係ノ進退ヲ議セシム可ラズ主任記者ヨリ社



ニ商議スルトシ然ラサル場合ニハ社長之ヲ取上ケサルノ成規ト為スヘシ是レ  
詭計ヲ防キ規律ヲ正スニ於テ缺ク可ラサル要件ナリ又々会計上ニ差弊有  
ク及ス程ノ紙面ノ整理更替ヲ為ス時ハ主任記者ノ素ヨリ獨斷ニ為ス可ラ  
サル至テ御稟知社下存シ

以上ハ社長カ編輯上ニ對シテ存スル権力ノ要概ナリ而シテ主任記者カ有  
スベキ権力ハ凡ソ左ノ如クナルヘシ

一 編集事務全件ヲ統理ス

一 編集員採訪員ノ勤惰ヲ監査シ其解雇ヲ社長ニ稟議決行スル  
事

但シ年限約束ハ社長ヲシテ行ハシムヘシ

一 編集局員ニ職掌ヲ分保スル事

一 印刷部ニ對シテ地位ヲ為スラ得ル事

一 局員欠勤ノ許否ヲナス事

一 局員ニ賞與ヲ與フル事

一 通信者ノ勤惰ヲ檢シ褒賞増減ヲ為ス事

以上ノ數以テ外シテ新聞社ニ於テモ主任記者カ常ニ所ナリ該社ニ於テモ記  
者ニシテ社長ノ信任ヲ得ん其ハ自ラ此ノ権力ヲ存スルニ到ルノ義ト被存候  
ヘ共此般ノ権力ヲ始メヨリ明カニ與フルニ非ズバ記者ニヨリ社長ノ信任ヲ得ん  
ノ働ク為スラ難シスル者アリ去レバ何人ニテモ主任記者ハ此ノ権力ヲ存スル  
者ナリト確定シ置クテ所要之事ト愚考仕候

主任記者既ニ斯ル諸件ヲ掌ル以上ノ役員株主ニ密接ノ關係ヲ有セシメ一ニ  
編輯上ノ諮詢ニ應ジ一ニ編輯上ノ報告ヲ為サシメサル可ク又之レハ社長ニ  
備ヘテ社長ヨリ他ノ役員ト株主ニ傳ヘシムル順序トナスト雖モ同接ノ關係ハ  
往々詳ク悉サス又々斯クシテ逐条ノ疎隔ヲ匡スル期ナレバ記者ヲシテ自ラ

之ヲ為サシムヘシ即チ主任記者ヲシテ會議ノ席ニ坐ルイヲ得セシムルヲ以テ通  
當ノ事ト思考仕仕

株主會議ニ興ル者ハ株主ニ限ルノ成規ナレバ若干ノ空株ヲ興一各其  
上ノ株主トナスヘシ斯クナスハ種々ノ弊害ヲ生セント恐ル、者アラントモ  
モ一社ノ主任記者タル程ノ者カ會議ノ秘密ヲ他ニ漏ラシ一社ノ不利益ヲ去  
カ如中ハ萬アル可ラス只ニ弊害ナキノイテラス如斯クナレハ自ラ社業ヲ思フ  
深切ナル得ヘク又株主役員ノ多考トナレトモ勢カラサレハ彼此ノ利益ナルベリ  
善ニ思考仕仕

臨大社トシテ所於テ孰シモ甚大ナラシメシハ登録ノ記事ノ如キハ可成  
其文件ヲ是ニ秘シテ社ニ傳面ヲ外ニ統ツテ尤モ所要之處ト存候  
事務ノ取扱振込所アルモ冗費ノ多キモ皆テ内部ニ情實ノ多キヨ  
リ原固スル是裁下裁人モ信シ居リ候即チ之ヲ矯正スルハ新設ノ社ニ退

サ一時ニ施スノ外其内ニ存候該社ニテハ今日ハ非常ノ際ナルベケレハ編輯  
局員ト其條件給ハテノ如クニテ是レニシテ存候

新潟新聞及陸入新中兼帯ニテ

- 一五十四 主任記者一人
  - 一二十四 記者一人
  - 一十八 同 一人
  - 一十二 畫工兼記者一人
  - 一八 記者兼署名人一人
  - 一廿四 彫刻師 一人
  - 一廿四 採訪兼署名人三人
- 但し考差アハベキ事
- 校正者年高

一五四

勉勵賞与下日定款

ノ金百六十回四

合計員を減るべき見込に上りて實際調査の上ナラデハ卑見陳じ兼ハ  
且つ此件ハ社長ニ定ムテ御見込モ之アルヲ社存ハハ社長ハ御指令  
可成義ト存ハ

新時代價其他ハ凡テ先取ノ改革道リニテ可ナル事ト思考仕五  
東京ノ比較ナド云フモノアレドソハ都鄙ノ區別ヲ忘レタル誤論ト申  
シタカ候

第三 紙面改良ニ関スル卑見

一 紙幅印刷待裁共々リノ如クニテ先々異支ナカレハク社存ハ

一 社説 近時ノ趨向ヲ見ルニ種々事實ヲ臆列シテ鄭重周密ニ論スルノ

風トナリタルカ如クナレバ徒ラニ社説ヲ並列スルハ重氣ヲ免レズ罪知社凡

ノ書キ方ニシテ餘ッマラ又論題ハ之ヲ社説ニ掲ケザルトスル方尤モヨシカハ

心ヲ愚考仕ハ而シテ社説ニ付実スルヲ要セザル程ノ小問題トモモ多ク論

ヲ揮ヒ之ヲ雜罪探ト入ルハ是レハ至任記者ノ役目ト爲ス可シ又々社説ノ書

キ方ハ可成簡短ニシテ定マリノおぼク又ハ成ベク之ヲ著キ議論ノ精神ヲ実

易ニ知ラセリテ肝要ナルハシ又々社説ハ充分世人ノ信用ヲ得ル様ニセサルベカラズ而

シテニラ為スニハ議論自ラ著實ナラサルヲ得ス著實ノ議論ヲ立ル上ハ時トシテハ

中央政府ニ論ナリ多クノ政弊ヲ興フルハ却テ公平ヲ示スノ一手段トモ存ハ

ルノリハ政治注潑ノ時勢ニアラサレバ社説ノ論文ヲ政治ニ限ルハ偏頗ナリ法律注潑

憲商書大際均分ニ論スルニ必要ナリト存シ又地方ニ關係アル問題ハ殊ト地  
方ノ實際ヲ調査シ(時日後レテモ精密ニ取調ベ)テ論シ大概下日ニ兩ニ度位  
掲載スルヲ以テ始メテ地方新聞ノ本職ヲ全フスル義ト存シ

一 弊邪ノ可奉管單ニ綴リテ件數ノ多キヲ表ブ東京新聞ヨリ沿革スル記事  
ノ如キハ其價切リ扱フ為メノ習慣ナレドモ文章ナラズ大ニ端メサレテ種ニテモ多ク  
出ス様ニスルニ必要ナレドモ又該社ニテハ外報嫌ニテ外國ノ新聞ハ一種ニテ  
キ由ニ聞キ及ベド此節ノ弊ニテハ外報ハ隨分大事ナリ或ハ一時読者ハ之レヲ厭  
フヲアルモ漸次外報ニ注意スル様ニ養成セサル可カラズ去レハ外報ハ隨分浮山  
ニ出シ度ニ但シ外報ヲ綴ルニ尤モ意ヲ用ヒ可成沿革等ヲ附記シ讀者ノ理解ス  
ル様ニテスル又時事報知書ニ人ヲシテ面白ク感セシムル外報鮮ナカラス是  
等ハ現況ニテハ大抵陰入新聞ニシテ載セテ其旨ニ載セシメ読者ニ外報ノ面白ク  
教ユルニシテ考ヲ載スルノ故テ是支ナルベク秘存候又々種ニテハ極分長

文ニテ沿革シ難キ者少ナカラス然レドモ決シテ沿革シ難キニアラス記者  
カ全文ノ通読ヲ厭フト折衷ニテ短文ニナスノ勞ヲ辭スルニ由ル此種ノ者ニテ面白  
キ者アルハ讀者ノ倦厭ヲ来サル位ノ長サニ縮メ登錄スルノ肝要ナリ又々水  
兵事件ノ公判ノ如キ連日ニ渉ル者モ折衷ニテ餘リ紙面ノ大部ヲ費サレバ様  
々ニシテ總テ輕報ノ文伴ハ餘リ甚クニテ一見教人ノ手ニ成リタルカ如キ痕跡ヲ外ニ  
示サズ様致シタレドモ今ノ處ニテハ往々陰入新聞ト大新聞ハ一句一字モ失ナラザル雜  
報ヲ共ニ掲載スルノアルニ甚クモカサレバ爾后兩社ノ關係ヲ明ラカニセ  
ンニハ此辺ニモ心ヲ用ヘカメテ別様ニ綴ラセタキハ御同意ノトト存シ  
一 相場ノ近來日新報ニテモ大ニ勉強スル様ナレバ該社ニテモ一層精密ニシマケ分  
廣告ナドヲ省テモ相場ヲ澤山ニ出シタレ相場ノミニテ新聞ヲ取ル者モ數ナカ  
ラサルベク存シ  
一 廣告ニハ別ニ意見有存ナクハ

一以上数件共ニ校正ハ非常ノ注意ヲ加ヘサル可ラス殊ニ廣告相場ノ如キハ一  
字ト雖モ誤脱ナキ様精々力メラシメキト希望ハシテ廣告ハ客ニ對シテ殊ニ氣  
味ノ譯ナレバ社ノ信ヲ賣ラシカ爲メ差シニ字以上ノ誤リアルハ謝函ノ爲メ一  
日マケル方ニ長ク出スト云フコトヲ廣告ニ置ケル必要ナルベシ是レ一方ニ校正者  
ヲ戒ル爲メモナルヘクモテ他ノ一方ニハ廣告ノ依頼ヲ増加スル一端トモナルベシ  
又社説ニ誤植ノ多キハ觀客ヲシテ読ム所ノ厭ハシムル原因ナレバ社説ニ限リ  
筆者自ラ校正スルコト爲スベシ編者全済ノ校正ニ當リテハ到底之レヲ校正者ニ  
委セサルヲ得サル歟ト存存ハハ亦記ラシテ實際有致ナラシムルニ主任記者ニモ其責  
ヲ分擔スルコト宜メ置カレヌシ斯クセハ自ラ監督モ行病ク理合ナク存  
以上ノ宜否ニ行フニ甚ク之ヲ教考案ノ如クナレバ編輯員知右一致シ快ク  
社説ニ從フコトナラバ(現今ノ組織ニテハ到底出兼サレ理由ハ亦款ニ述ビ  
コトニテ推量サレタシ)決シテ實施スルニ難カラズ且社員方ノ勉強以テ之

或ハ出兼サルノ別アルニ過キサル歟ト思考仕候  
出兼取

### 雜入新聞改良

雜入新聞ハ前ニモ申し述フル如ク中以下ノ觀客カ然ラサレハ娛キノ爲ノニ求ムル仁カ  
ハ客操ナレバ可成平易ニシテ面白ク可笑シク綴ラサル可ラス去ルニモ拘ハラス近來  
ノ記事ハ稍々高尚ニ傾キ記者先生方東京新聞ヲ見ラレ御自分ニ面白ク珍  
ラレト思ハシタル話ハ人モ亦然ラント傳了サレ直ク其ハ轉載セラル、モノモ純々  
有之トモ存存ハ右觀客ニ對シテ不親切ナレハ云フ迄モナク果テハ不利益ノ一  
策トモナルヘク存存又々續キ物モ之ニ傳ノ如キモサレ東京風ニ改良シタク  
候(強ク新聞ノ方言ヲ用ユ可ラズト云フニハアラス)何レノ地方陰入新聞ニテモ  
俗ハ皆ナ東京風ナリ思フニ東京風ニアラサレハ新聞ノ品格ヲ下スル免  
レサル事ト存存ハ尚ホ此ノ他ニ申入レタキ條々モ抄カテスハ其先ツ差當リ重

モナル件々右之通りニハ此及及西回各也

明治廿年四月廿日

大澤邦太郎

大澤邦太郎  
謹啓

條約改正ノ議ニ付建言

精策等伏シテ近來政府施治ノ方嚮ヲ察スルニ多クハ其宜シキ  
ヲ失シ痛嘆大息ニ禁ヘサルモノアリ然レハ精策等敢テ漫リニ之ヲ  
言ラリ好コス政府付テ顧ミテ其非ヲ覺ルニ難カラサル事ノ如キ  
ハ之レヲ自者ニ任セントス而シテ今ヤ独リ政府ノ付省ニ委シ去ル  
能ハス進テ甚言セシト欲スルモノアリ何リヤ他ニモ政府近且ト外交  
ヲ失シ速カニ之レヲ理スルニアラスニハ國家ノ存ニ亦テ測ルヘカサルモ  
ノアリハナリ夫レ内治ノ事ハ設令政府ノ施措宜シクテ失スルハ一法  
一令ノ下ニ之ヲ兼ハルヲ得ヘシ且テ難事トナササルナリ若シ夫レ外交ノ  
事ニ至リテハ僅カニ一歩ヲ失スルニ復々之ヲ救濟スル能ハサントス視ルハ  
レ徳川政府カ維新ノ始ナクモ外交ヲ失シ不利不當ノ條約ヲ結ビテ  
以來爰ニ三十年内政大ニ面目ヲ幸テ改正ノ期亦ク去リテ十

有五年ノ今日ニ及ヒラセ當我カ多有ノ權利ヲ回復スル能ハス  
民皆不幸可憐ノ境遇ニ呻吟スルニアラヌヤ殷鑑實ニ遠  
カラス然レニ政府カ今回条約改正會議ニ放テ議決セル司法  
權ニ関スル條約案ヲリト云テ見ルニ又夕更ニ不利不當ナル條約  
ヲ外國ト締結セトスルモノ、如シ該條約案タルヤ敢テ政府カ  
人民ニ示シタルモノニアラザルヲ以テ其詳細ヲ知ル能ハスト莫ク  
吾土ニ流布スルモノニ就テ觀ルニ一讀悲憤ノ情ニ禁テハカレテ  
ノアリ精策等あり日本人民タリ焉シフ之ヲ黙クニシテ附  
去ルニ忍ビヤ請フ左ニ之ヲ開陳セシ

決議ノ不當不利

第一 泰西主義ニ則トリ日本ノ法律ヲ制定シ及ヒ司法上  
ノ組織ヲ定ムル非在ニ其困難

司法上ニ就テ決議セル決議案ノ第四条ヲ案スルニ曰ク

日本帝國政府ハ泰西主義ニ則トリ本條約ノ定疑ニ遵ヒ

司法上ノ組織乃ヒ成法ヲ確定スルシ之ヲ類別スルハ第一

刑法 第二 刑吏訴訟法 第三 民法 第四 商法

第五 民吏訴訟法此外警察規則及ヒ準則等目下實

施セラレ、モノ、中ニ能テ可成改正ヲ規テ彙類スヘシ

ト是レ我國法律ヲ學ブ多強テ泰西流ノ主義ニ則ラシトナル

モノナリ我國ノ司法組織ヲ草ト濫リニ泰西ノ風ニ據ラシト

スルモノナリ是其非蔽フヘカラサルノミナラス抑モ亦々難キヲ我

ニ責ルモノト公言セザレハカラス夫レ國各其宜シキアリ其宜シ

キニ從テ法ヲ立、法ヲ司レ是レ獨立國ノ特權ナリ敢テ他ヨリ

其間ニ喙ヲ容レザレハ是レ獨立國ノ對スル國際上ノ敬禮ナリ

之ヲ犯スル獨立國ノ特權ヲ侵害スルナリ國際上ノ敬禮ヲ壞  
 ルモノナリ故ニ英國自ら英國ノ宜シキニ從テ其律ヲ制シ其法ヲ司  
 ルニ當テ何レノ國ノ政府モ之レニ干渉セルコトヲ聞カス由キ又之レニ對  
 シ治外法權ヲ主張シタル國アラシク佛國モ亦々然リ伊太利西班牙  
 米國又皆然リ苟モ半屬附庸ノ國ニアリキ以上ノ天下何レノ國ト  
 ニテ此特權ナカラシヤ視テ其英ト米ト如キハ母子ノ邦國ナレハ  
 諸種ノ法澤大抵其主義我原則ヲ左フスルニ勿論ノ事タルニモ  
 係ラス尚且ツ往々相抵觸スルノ点アルニテラスヤ現ニ米國中或州  
 ニ於テ全ク佛國法典ニ則ル民刑ノ法律ヲ有スルニテラスヤ母  
 子ノ關係アル英米國ノ間尚且ツ然リ況ニヤ我彼ノ在ク人種ヲ  
 異ニシ邦俗ヲ殊ニスル東西兩國ノ間ニ於テテヤ強テ日本ノ法律  
 ナレテ日本ノ司法組織ヲシテ畫シテ泰西ノ主義我ニ批ラシナント

孰スレニ我レ其レ能ク為レ得ヘカラサルヲ知ルナリ行ヘ得ヘカラサル  
 ナ知ルナリ

雖然今テ假リニ數歩ヲ讓リテ日本立法者ハ大膽ニテ日本ノ慣習  
 ヲ破滅シ日本ノ國風ニ特産シ能ク如此ノ法律ヲ制定シ得ルハ其レ如  
 何レノ法律ニシテ始テ條約各國ノ承認ヲ得ラルヘキヤ其所謂泰  
 西主義ニ如何ナルモノヲ指スヤ獨國ハ其自國法律ノ主義ヲ以  
 テ之ニ合ハルモノヲ排斥セン英モ佛モ伊モ皆々各其自國ノ法律  
 原則ニ適合セサル箇條ヲ承認セサルナラシ果シテ然ラシニハ我  
 其折角ノ立案ヲ終ニ成法タルノ日ナキヲ疑フナリ是等ノ諸法  
 律制度ニシテ條約各國ノ主義我ニ適合セサル間ハ外人決シテ此等  
 法權ヲ撤去スルコトヲ肯セサルニ而シテ其成ルノ日ノ期スヘカラ  
 其如クナレハ改正條約實行ノ期早シテ何レノ日ニカアル轉々望



洋ノ歎ナキ能ハス是豈其非歟スカラスシテ且難キヲ我レニ責  
ハレモノニアラサルカ

第二 混合裁判所ヲ置テ非及其構造ノ不當不利

又決議案中本邦ヲ開放シテヨリ三ヶ年ノ内ニ於テ内外人混合裁  
判所ヲ設置スルノ約アリ即其第七條ニヨリ

其原告タルト被告 是トテ同ハスハ一人若シク數人ノ諸  
外國人カ與リタル民刑訴訟ヲ日本裁判所ニ於テ裁判  
スルニ當リテハ左ニ列記シクハ條ニ遵ハルハカラス否レハ其  
訴訟及判決共ハテ無効クハレシ

一 始審裁判所控訴院及ヒ大審院ノ判事ハ外國裁判官其  
多數ニ居ルニ事下等及ヒ高等諸院ニ於テ判決ヲ下  
スニ當リ判事ノ數ハ法律ニ規定シタル定員以下タル可

ラス(中略)

六 始審裁判所ハ左記ノ各地ニ設置セラル可シ

横濱 函館 新潟 神戸 京都 長崎 名護屋

右各地ノ内ニ於テ經綫ノ後使不便アル時ハ都合ニヨリ裁  
判所設置ノ地ヲ換フモ妨ケヤシ

控訴院ハ左記ノ兩地ニ設置セラルハレ 東京 大坂

大審院ハ東京ニ設置セラルハレ(下略)

ト是レ條約改正後ハ我日本國內ニ二個ノ司法ノ極點ヲ設ケント  
スルモノニシテ即ケ二個ノ裁判權ヲ並立セシムルニトスルカ如シ是レ  
豈ニ法律ノ統一ヲ紊乱セントスルモノニアラスヤ抑モ一國ノ安寧ヲ  
保タンカ為ナシハ法律ノ統一ヲ維持スルヨリ多ク急務ナレナレ是ヲ以テ  
何レノ自由國トモ是レ司法權程威嚴ヲ占ムルハナリ何レノ帝王國ト

是は司法權程獨立ノ位置ヲ有スルナシ是レ然ラザルニ其法律ノ統一  
ヲ欠キ到底國家ノ秩序ヲ維持シ難キレハナリ  
夫レ大審院或特例ノ外裁ノ最上權ヲ有スル處タリ司法ノ極是ナ  
リ苟モ法律ノ統一ヲ失フテ欲セバ何リ二個ノ最上權ヲ置クヘンヤ  
二個ノ司法ノ極兵ヲ設ケテ以テ法律執行ノ統一ヲ成シテ欲シテ豈  
得ヘケン同レク是一國ノ法律ナリ一ノ内國人間ノ關係ナリトテ之ヲ乙  
法廷ニ於テ裁判シ一ニ内外交渉ノ關係ナリトテ甲法廷ニ裁判セ  
サヘカラサル道理アリヤ嗚呼是レ彼ノ所謂治外法權ノ不當不與ト  
何ヲ擇シ其弊一及フ所感ニ一國內ニ種ノ法律行ハルカ如キノ  
奇觀ヲ望センモ未ダ測ルヘカラサルナリ是ニ混交裁判法ヲ設クルノ法  
律統一ノ原理ニ背ク一如此矣請フニ其構成上ニ付テ之ヲ細論セ  
ン

一決議審事民刑裁判官共ニ外國人ノ多數ヨリ組織シ刑事評  
定會ニモ外人多數ヲ占ムヘシトノ條アリ其不當不利ナルハ敢テ歎ケテ  
要セスレテ明カナリ今我ニ於テ忍テ混交裁判法ヲ設クルヲ諾スルトスルモ  
其裁判官ハ同等ナル内外人ノ同負數ヨリ組織スルコトヲ對等ノ國際  
ニ於テ至方ナルヘシレシ一方ニ偏重スル一我其不平等ナルヲ公言  
セサント欲スルモ得ヘカラザリ

二又刑事ノ豫審ニ專ラ外國裁判官之ノ當リ立會檢事ハ凡テ外  
國人タルヘシトノ條アリ

是レ亦不當不義ニシテ且我邦人ノ最モ不利益ナルモノナリ凡テ刑事ニ  
於テハ豫審ニ當テ大抵無罪ノ事實決スルモノニシテ獨リ之ヲ外人ニ委  
カ如キハ内國人ニシテ極テ危險ノ位置ニ立タシムルモノト云ハサ可カ  
ラス又檢察官ヲ外人ニ委スルニ我法律顧問ニボアリナドカ云ヘルカ

如う全う該官、性質ヲ誤ルルモノニシテ固ヨリ不當タルヲ免レズ左ナ  
キタニ檢察官ハ常ニ被告ト反對ノ位置ニ在リカ故ニ其公安  
ヲ維持スル職權ヲ以テスルニセヨ其全弊ヲ被先ヲ敵視スルノ  
感情ヲ惹起ケルニテ其常ニ今混交裁判法ニ從ヒ、既ニ外國  
人多數ヲ占ムル裁判官ノ前ニ於テ之レカ原告官タルモノ亦テ外人  
ナル時ハ其ニ多リテ日本人ノ民權ヲ禁與スモ強ニト也、際キケルモノト  
謂ハザレバ可カラス日本人民タルモノ誰シカ安シシテ如キ裁判法ニ服ス  
ルモノワラニヤ況ニ之レニ服スレテ控訴上告スルモノ亦テ外人多數、  
法院ニ訴フルノ外ナキニ於テサヤ  
三又日本代人議會ニ外國代人ノ入會ヲ許シ外國人ノ議會ニ對  
シテ教導ノ權ヲ有スヘシトノ條アリ是亦テ不當ト謂ハザレバ可ラス凡  
ソ何種ノ議會ニ於テ之議定整理ノ任ヲ控ケレタル議長ノ外人

モ其權カニ差等アルヘキ謂ナシ若シ一ノ議員・シテ他ノ議員ヲ  
リ優等アル權カアルカ是レ議會ニテラス況ニ又教導者ヲ項テ  
法律ノ路ヲ誤ス是法律學校ナリ講習會ナリ是外人ヲシテ我代言  
人社會ヲ蹂躪セシメントスルモノナリ況ニ又其議會ノ議決ヲ不當  
ナリトスル時ハ外國判事ヲ支配スル如ク監督法院ニ上告スルノ權  
サハ與フルニ於テハ益々其非ヲ鳴ラササルヲ得ス  
四又混交裁判所ノ外國裁判官及檢察官ノ任期ハ女シモ四ケ  
年ト定メ其裁判官ハ監督法院ノ命令アルニ非ザレバ任期間  
轉免スルヲ得サル者ニシテ其監督法院ナルモノハ大審院謀  
ノ外國裁判官ヨリ組成シ秘密投票ニヨリ選ビ三人ノ外國裁  
判官ヲ其別ニ加フルノ權アリ而シテ其裁判官ノ轉免ヲ  
決スルハ三人ノ二以、同意ヲ得ハキモノトスルノ條アリ是レ

亦多不考其甚しキモノト謂ハレ可カラスルリ裁判官タルヘキハ泰西普通ノ制ニシテ現ニ我日本ニ於テモ泰西主義ニ則リ此ヲ立テテリ年限ヲ定ムルノ弊害多キヲ以テ泰西諸國皆此制ヲ設ケルニモ拘ラス特リ我國ニ設ケルコトスル混交裁判所ニ於テ此制度ヲ採用セサルハ何ソヤ況ニ其或ハ專横非行ヲラシムルコト恐レルハコリ之レカ監督法院ヲモ設ケルナレト却テ外國法官ノミヲ以テ組成セル法院ノ監督ヲ受ケルニ過キス利害相及スル内國人ノ心ヲ以テセハ妨礙ノ監督法院アリトテ誰レカ安シテ外國法院官ニ信ヲ置カシ其年限アル尚ホ忍フヘシ之レカ監督ヲ全ク外人ノ權内ニ委テ至テハ日本人民タルモ誰レカ能ク忍フケンヤ且又諸外國臣民ニモテ日本帝國法庭ノ判決ニヨリ無減等死刑ノ宣告ヲ受ケタル時ハ條約各國ハ其罪人ノ引渡ヲ請求スルノ權アルモノトス

但し右ノ支情ニヨリ罪人ヲ引取リタル以上無論自國ノ法律ニ從テ處刑スヘキモノトスル領事裁判權ノ消滅スル期限ニ先リ條約各國ハ別ニ死刑犯人取扱法ヲ議定スヘシトノ條アリ是レ亦怪訝ノ至リト謂フヘシ抑モ條約各國ハ一トシテ己等ノ國人ニ利益ニシテ日本國人ニ最モ不利ニ裁判構成ヲ要求セサルナリ議決セサルナリ尚ホ能クテ無減等死刑犯人ヲ自國ニ引取り更ニ之レ自國ノ法律ニ照シテ裁判セシトスルハ是レ將々何等ノ專横ソヤ外人多數ノ混交裁判所ニ於テ泰西主義ニ則リ條約各國ノ承認ヲ經外國檢察官ノ立會ヲ以テ裁判サレタルニ減等スヘキ理由ナリ情狀ナキカ故ニテ其犯罪人ハ無減等死刑ニ處スヘキノ宣告ヲ得タルナリ而レモ尚ホ甘シテ之レニ服罪スルヲ得カレノ理由アル乎日本ノ法律之

ヲ各國ノ法律ニ比スルニ固ヨリ不完全ナルヘシト云モ死刑犯人ニ對シテハ哀訴ノ特例アリ又死刑ヲ執行スルヤ必ラス司法大臣ノ指揮ヲ請ハカレ可ラス司法大臣ニ之ヲ

天皇陛下ニ上奏シテ而シテ後々如何ナラ以テ之ヲ執行スルヲ例トス日本刑法犯罪法ノ死刑ヲ忽諸ニセザル如キ此等ノ特典アルモノトス尚且不當ニモ死刑犯人引渡ノ權ヲ得ントスルニ至ラハ外國人カ我國權ヲ蔑視シ我國法ヲ輕視ス其極矣ニ違セリト謂ハカレハカラス

### 決議ノ抵觸

決議案ヲ通覽スルニ往々前後相抵觸シ表裏相及覆瓦ノ條項アルヲ視ル是レ皆實施上困難ノ原因ナラザルハカレ諸ヲ指摘論明セシ

一其第一條ニ於テハ本條約締結後二年個年ノ中ニ於テ全國内ヲ開放シテ永久外人ヲシテ雜居セルムヘシトアリ然ルニ其第一十二條ニ於テハ本條約ニ通商條約ト共ニ批准交換アリタル後十七年間實施セラレハモトス云々トアリ第一十二條ニ所謂本條約トハ第一條ヨリ末条マテヲ指シタルヤ明ナリ然レハ全國全開放モ先十七年間大ケ日本帝國政府ニ於テ兼諾シタル事知レヘシ而レニ第一條ニ永久雜居セシム可シトアリ前後抵觸モ亦甚ク甚クシカラスヤ若シ之ヲ解釋シテ十七年後ハ本條約中外人ノ諸種ノ特權ヲ廢止スルヲ得テ永久ニ開放雜居ヲ許スノ意ナリトセハ甚ク嘉ス可キ條目ナリト是レ期ハ專ラ日本ノ利益ニ解釋シタルモノニシテ若シ之ニ反シテ外人ノ利益ニ解釋セシニ十七年、後ト云ハ全國開放ノ約ハ依然トシテ永久繼續セ

外人ノ權義ニ便ニ根據決定スルノ意ナリト主張スル  
得ヘシ果シテ後者ノ如クナラシムルニ再ニ十七年後ニ至リ今日  
ノ如ク改正會議ニ於テ種々ノ難題ヲ提供スルヤ知レハモ  
ノモ何レシモテモ他日ニ志ヲ遺スモノト謂ハレ可カラズ

ニ其第二條ニ於テハ日本帝國政府ハ萬國公法ノ通則ニ從ヒ日本帝  
國臣民ノ應ニ有テ可ク權利及特權ヲハルテ外國人ニ享有セシム  
ヘトアリ然レモ決議案ノ全文ヲ通覽スルニ日本帝國臣民ニハ  
萬國公法ノ通則ニ於テ有スヘキ權利尙モナクシテ特リ外國人  
ニ於テハ萬國公法通則外ノ諸種ノ特權ヲ有スルヲ如ク試ミ  
ニ具ニ三ヲ尤ク舉ゲシ

甲内外人交渉ノ案件ヲ裁判スルニ外人多數ノ法廷ニ於テスルハ  
是レ内外人對等ノ權利アリト云ヘキカ

乙改正條約實施後ハ外人ト虽モ日本ノ法律ニ服從スルモノナ  
ルニ外人特リ外人多數ノ裁判所ヲ有スルニ是レ萬國公法上  
ニ於テハ通則ニ許ス處ノ特權ト謂フヘキカ

丙内國人刑事被告告ル時トモハ外國裁判官ノ豫審ヲ受ケルヤ  
ルヘカトナリテ及多公檢事ノ外國人タルニ内外人對等ノ權利ヲ  
失スル者ニツラカレ

丁外國代官人ノ我代官人議會ニ教導タルノ權ヲ有スルニ是レ亦  
公法上通則ノ特權ニ在リ

戊外國人カ日本ノ裁判官トナリテ其職ニ就キナララ尚ホ日本人ノ監  
督ヲ受ケスレテ外人ノ監督法院ニ一任セザレ可カラザレテ是レ亦  
外人カ公法上ノ通則ニ據リテ有スル處ノ特權ニ在リ

己日本法廷ニ於テ無減等死刑ノ宣告ヲ受ケルモノヲ條約

各國、其引渡ヲ請求スルノ權アリ又該犯罪人ハ更ニ自國  
ノ法律ニ從テ所斷セラレ、權アルハ是亦公法上通則、特  
權ナル乎

凡萬國公法ニハ萬國人民皆テ同等ノ權利アルヲ聞ケ未テ同等  
國際ニ於テ甲國人民ト乙國人民トノ間權利ニ差等アルヲ聞カ  
サルナリ然ル右ニ列記セル所、如シハ彼我ノ間權利ニ大差アルヲ  
明カナリ是豈日本帝國ノ條約各國トノ關係ヲ以テ始メヨリ同  
等ノ國際ト認メタル者ト云フテ得ンヤ然ラハ第二條ハ有名  
無實單ニ甘言以テ我ニ啗ハシタル者ニアラサルカ予盾モ亦  
甚シト云フシ

三第十一條、於テハ條約批准ノ後二個年ヲ待テスレテ外國人  
ハ日本ノ民變裁判權ノ下ニ服從スル時ハ難免スルヲ得

ヘシノ明文アリ是亦支吾抵觸ノ最モ甚シキモノト謂ハサル可  
カラス抑モ各國公使カ本條約締結後二ケ年ノ後ヲ待テ全國  
ヲ開放セシムキヲ決議シヨレ所以、モノハ未テ日本ノ諸法律不  
整頓ニシテ泰西ノ主義ニ合ハサル者アリ且裁判所ノ如キ全  
ク日本人ノミヲ以テ組織スル致底信ヲ置ケ能ハストスルニアラ  
ハゴリ種々ノ準備ヲ促シ二年間ノ準備時間ヲ我ニ與ヘヨレ  
モノナレハ然ルニ締約後直ニ難店ヲ設ケル者アル時ハ日本民  
事ノ裁判權ニ服從スレハ可ナリトハ豈ニ解シ難キノ至リナラスヤ法  
律制度ノ準備整頓後、日本ノ裁判官ト民既ニ信用トハ  
カラストセハ何故ニ準備前ノ裁判官ヲ信用シ得ルヤ何故  
ニ泰西主義我ニ合ハサル法律ニ服從スルヲ得ルヤ若シ苟モ直  
ニ日本ノ裁判權ノ下ニ服從スルヲ得ラハ何故ラニ法律

法律ノ整理混交裁判所ノ設立ヲ得ツテ要セシヤ二者致  
到底兩立ス可カラサルヲ知ルナリ

四其第五條及第六條第十九項ニ於テハ日本帝國政府ハ第一條  
ニ定メタル時内ニ於テ前條列記ノ諸法律ヲ布告スヘシ而シ  
テ第一條ニ定メタル時日前八ヶ月以内ニ於テ諸法律ノ本文ヲ  
英文ニ記シ之レヲ諸外國政府ニ通達スヘシ以下略ス  
又外國罪囚禁錮ノ持例及獄則懲懲監則ハ第四條ニ約  
定シタル諸法律ト共ニ諸外國政府ニ通達スヘシトノ條アリ  
其明文ニ於テハ單ニ通達スヘシトアレバ固ク處ニミレ  
ハ單純ナル通知ニテラスシテ條約各國ニ承認ヲ得シカ爲  
メノ通達ナリ即チ外國政府ハ我法律ヲ調査スルノ權アリ  
トノ評議ナリト果シテ然ラバ所謂通達ハ單純

ノ通達ニテラス認許ヲ請フノ通達ナリ認否ノ權彼ニア  
ルナリ是亦條約表面ノ文字ト其裡面ノ意味ト大ニ相及ス  
ルモノニシテ危險ノ甚ク大ナルモノト謂ハル可カラス且第四條  
ニ於テハ現ニ日本帝國政府ハ中略一司法上ノ組織及成法  
ヲ確定スヘシトアリ既ニ我ニ確定スルノ權アリ何ソ外國政  
府ノ調査ヲ要セシ況ニヤ其認許ヲヤ

### 改正條約ノ決議ト現行條約トノ比較

現行條約ノ不當不利ナルハ固ヨリ蔽フ可カラサル所ニシテ就  
中治外法權ノ如キ海關稅則ノ如キ連帶約定ノ如キ一トシテ  
特リ彼レニ我レニ不利ナラサルハナク之レヲ萬國公法ニ照ラフモ  
之ヲ普通ノ法理ニ考フルモ不當不法ヲサルハナシ然リト雖モ  
之レヲ今回ノ改正案ヲ実行スルノ場合ニ比スレハ尚ホ優ル者ヲ



リ在之ヲ對較セシ

抑モ現行條約ニ於テ治外法權ヲ實行スルヤ其及フ如僅々  
外人居留地内ニ止マリ外國人カ被告タル場合ニ限り各國領  
事ハ各其自國ノ法律ヲ適用シテ裁判シタルニ過キス率土ノ瀆  
漫リニ他國ノ法律ヲ公律セシムルハ固トヨリ獨立國ノ体面ト人民  
ノ利益名譽ニ汚損スルモノナリト雖モ今之ヲ混交裁判所ノ構  
成及該條約締結後箇ノ後ニ至リ全國開放ノ条々ニ比スレハ  
其利害大小果シテ如シソヤ况ンヤ今後制定スヘキ法律及現行  
ノ法律ニシテ必スシモ盡ク泰西主義ヲ奉セサルヘカラサルニ於テ  
又

一現行領事裁判法ト改正條約ノ混交裁判法ト我國獨立  
ノ体面ヲ損スルニ於テ果シテ徑處アルヤ且其利害ノ大小果

シテ如何

今二者ヲ對照スルニ其我日本獨立國ノ体面ヲ損スルニ至テハ二者ノ  
間更ニ徑底ナキノミナラズ却テ混交裁判法ノ懼ルヘキ弊害アルヲ  
知ルナリ何ヲ以テ之ヲ去ラ其日本帝國内ニ於テ別ニ一ノ大審院ヲ有ス  
ルヲ以テ之ヲ云フナリ其裁判官ハ外人之レカ多数ヲ占ムルヲ以テ之ヲ  
云フナリ其檢察官ハ皆外人ニシテ刑吏ノ豫審判モ亦皆外人ナル  
ヲ以テ之ヲ云フナリ其監督法院ヲ盡ク外人ヨリ組織セラレシヲ以テ  
之ヲ云フナリ其外國代官人ニシテ日本ノ代官議會ニ教道ヲ權リシ  
ヲ以テ之ヲ云フナリ其權カノ及フ所居留地ニ向テ止マラス全般ニ  
涉ルヲ以テ之ヲ云フナリ其管轄事件タル單ニ外人ノ被告タル場合ニ  
止マラス總テ内外人交渉ノ事件ニ存スルヲ以テ之ヲ云フナリ嗚呼如此  
ニシテ能ク法權ヲ恢復スルイテ得ヘキカ如此ニテ能ク獨立國ノ特權ヲ

保持スルヲ得ヘキカ如此ニハ日本國ノ特權日本人民ノ權利安全  
及利益果シテ却テ在テ存スルヤ精策算寧口現行領事  
裁判法ノ區域範圍ノ狹隘ニシテ獨立ノ体面ヲ汚シ内國人民  
ノ私益ヲ損スル較ク少ナルノ優ルニ及カセテ確信スルヤ且領事純  
粹ナル外國ノ官吏ニシテ而シテ外國ノ法律ヲ行フ固ヨリ其處ナリ今  
混交裁判所ノ外國裁判官ニ日本ノ裁判官ニシテ日本ノ法律  
ヲ行フ其名義義ナリト雖モ其實情ヲ想像スルニ言ラニ思ヒサレモ  
ノアラシク況ンヤ外人カ日本ノ官吏トナリトテ敢テ外國ノ臣民  
ニアラスト云々ヘカラス惟モ官吏ト事國民ノ大特權ナリニモ  
拘ラス彼レ若シ靦然トシテ我日本ノ高等官吏ノ一部ヲ在テ  
威福リト下ニ權ニスル如キアラハ是レ豈ニ我國國民ノ特權ヲ侵ス  
モノニアラスヤ是豈ニ我國危急存亡ノ秋ニアラズヤ

二、現行條約ノ下ニハト改正條約實施後ニ於テハト我國  
法律上ノ有様ニ於テ異同ヲ生セサカ其人民ノ便否果  
シテ如何

現行條約ニ於テハ別ニ日本帝國政府カ制定布告ス可キ法律  
ヲ條約各國政府ニ通告其調査ヲ受ケルヲ要セカレナリ也  
又諸般ノ法律盡ク恭西主義則ラザル可ラザルノ約アラシヤ  
故ニ從來何等ノ法律條例ヲ制定スルモ專ラ我宣シキニ從ヒ  
他邦人ヲシテ當リ喙ヲ其間ニ容レシマス我ニ於テ充分立法  
ノ自由ヲ有シタリ今ヤ改正條約案ニ據ル時ニ全ク之レニ及シテ  
自由ヲ失ヒ茲特權ヲ侵サレタリト謂ハカレ可ラス是ヨリ日本國  
持有ノ性質ヲ改メ可ラス古來ノ慣習人民ノ好尚ヲ或  
ハ恭西主義ニ合ハサレテ盡ク之ヲ廢却セサレ可ラス果シテ

然る人民ノ幸不幸、國家ノ安危如何ヲ見、我現行刑  
法治罪法、如何多クハ彼、泰西主義、則テ制定スルモリ  
ナリト云ハ、尚ト往々日本古來ノ慣習ニ其キルン法文ツクニ  
ラスヤ例ハ、我刑法中ニ於テ自首減罪法ノ如キ又民事トシ  
於テ長子相続法、如キ皆泰西主義ニ合ハセテナリ若シ一  
朝ニシテ之レヲ改正変更セハ人民ノ便不便果シテ如何ツヤ  
又彼陪審ノ制、如キ利息無制限ノ法、如キ彼レツリテハ  
良制佳法ナルヘシト雖モ我ニツリテハ適用其宜トモリ得サルハ  
キヤ未ダ容易ニ判テ可ラザルヤリ其等ノ類例一々枚舉スル  
ハ暇アリ

之ヲ要スルニ裁判權ノ伸縮ニ於テモ又立法上ノ自由ニ於テモ  
今日法學家ノ現行條約ニ下ルテ者ハ、幾等ナルトシナリ  
ス其福言ノ及所遂、我國ヨリテ埃及ト其速合ヲ同フ  
セシムルニ至ラシ懼レカレ可ケンヤ

回想スルニ維新ノ始、諸外國ト條約ヲ締結スルヤ當時我國未ダ  
人文進マズ法律制度改メテ百事政米、新主義ニ悖ル人情  
風俗亦隨テ旧態ヲ脱セザレバ、執如クハ、強テ完全ノ條約  
ヲ結ビ一時ニ改米各國ト對等ノ交際ヲ求ムト、是ハ到底得  
可ラザレトシテ當時ニ在リテ利害得失容易ニ判断シ得ヘカ  
リシモノアリシナラン然レモ爾來西化日ニ進漸、彙短採長  
百度此ニ改マリ高法是ニ新ナリ於是年最早旧條約ノ商  
セサルヲ感シ且政府モ人民モ漸ク其不利ノ條約ナルヲ悟  
リ遂ニ條約改正ノ議起ル而シテ其議起リテ今日ニ至  
リ始テ改正會議ヲ開クニ至ルマテ茲ニ幾星霜ヲ經過セルヤ

知らず其間を路者及は民を改変家、苦心幾何を宣へ百  
難を凌ぎ千辛を嘗み、漸く今日開会、運に及らんモノ  
なり然るに今我有司カ外人ト決議せん所、聞、以上開陳せんカ  
如キ不利不直なる者あり嗚呼是レ抑也

陛下ノ望マセ給フ処、凡ヤ人民ノ冀望スル所ナルヤ  
陛下ノ望マセ給フ処、從來、如キ不正ノ條約ヲ解キ正當ニシ  
テ且ツ我國ニ利益アルノ條約ヲ締結スルニ在リ人民ノ望ム所  
モ亦是レノ外ナラザリ而シテ今更々皆之レニ違ヒ從來ノ條約  
ニ比スレバ更ニ幾層ノ不利不直ヲ極ムル者ナリ何ツヤ當高  
者又其非ヲ知ル者ノ如ク遂ニ會議ヲ中止スルに至リたりト  
虽此會議ノ中止ハ決議ヲ取消スル効力ナラズ然レモ其者ナリ故  
ニ政府ハ好シ幾十年間之ヲ中止スト虽此一反決議セリ

改正案ハ決シテ消滅ニ歸ス可キ者、マラス若シ夫レ他日再  
ニ改正會議ヲ起スル時、至テハ彼レ是ヲ根據トシテ種々ノ  
難題ヲ提出シ大ニ我ヲ苦シナシテ辱ヲ燒クヨリモ明ナリ蓋シ  
今回ノ決議ヲシテ若シ彼レ不利ナラシムル彼レ所成之ヲ打消シ  
勉メ將來ノ會議ニ於テ之ヲ引用スルナカハハシト是レ彼レシ  
利ナルノ決議ハ彼終之ヲ引用スルヲ利益トス今回ノ決議ハ彼  
レ豈ニ將來ノ會議ニ於テ之ヲ引用セシテ止マランヤ抑モ從來  
我レ至當ナル條約改正ヲ求ムル權アリテ彼レ實ニ之レヲ改正セ  
カレ可カラザルノ義務アリ然ルモ尚且つ更ニ托シテ之ヲ遂ムル  
ヲ肯セカレニアラスヤ今彼レ無クシテ更ニ托辭ヲ以テ是レ豈  
ニ將來ノ條約改正ニ一大障礙ヲ生シタリモノニアラザランヤ  
嗚呼我有司ト虽此レ皆日本帝國ノ民ナリ帝國ノ為ノ豈ニ

此不利不害ノ決議ヲ為スルヲ歎スル者ナラズヤ我有日カ政府  
ニ立テ以來己ニ二十余年必スヤ多少ノ泰西ノ交情ニ熟シ外  
文ニ通スルヲ望ミ決議ノ不害不利ナリト見ルノ明ナランヤ  
而シテ其成跡ヲ見ルハ直毛モ外交ニ通セサル者ノ如ク直毛モ日本  
ノ國權ヲ重シセザルカ如ク者ナラズ何レハ顧フニ是外人ノ威逼ニ  
遇テ終ニ交ニ至レシ者ナラン然レトモ我政府カ外人ノ威逼ニ  
遇テ不利益ノ條約ヲ締結セルハ帝位ニ一再ノミナラズ政  
府ハ何リ今固ノ會議ヲ開クニ當リ豫メシテ之レヲ避ケルノ道ヲ  
講セザリシハ精策算ヲ以テ視ルニ夫ノ從ラニ外交ヲ秘密ニシ  
テ直毛モ會議ノ成行ヲ知ラシメザリシ一實ニ政府カ今固モ外  
人ノ威逼ヲ避ケル能ハス直毛モ失敗ヲ招クニ所以ナリト信スルナリ抑  
々外人カ日本帝國ニ恐ル、所ノ者ハ日本政府ニアラスシテ日本帝國

多數ノ人民ナリ否多數人民ニラスシテ多數人民ノ公議ナリ今  
夫レ内閣諸大臣袂ヲ連ネテ條約改正ノ議席ニ臨リモ外人ノ眼  
中ニ以テ辱小ナシ日本ナカレハレ況ニメ井上伯學身之レニ當ルニ  
於テヤ外人ノ必ス伯ヲ視テ卿見曹ノミ何ツ大國ノ使臣ニ當ルニ  
得ント心竊カニ冷笑セザル疑ナシ只ク夫レ然ラ故ニ無法ノ請求ヲ  
ナシ無禮ノ言ヲ並發シテ憚ラサルナリ此威逼ニ侮辱ヲ避ケルニ  
我カ微弱ナル兵カニ効ナシ我未熟ニ外交技倆ニ用ヤシ帝号  
敬人民ノ輿論ヲ擁護シテ之レニ當ルニ在ルニ然ルニ政府カ為ス所  
ヲ視ルニ只皆皆外交ヲ秘密ニシテ人民ノ輿論ヲ杜塞シ外人ノ我  
レヲ侮リ我ヲ嚇カスヲ愈々急ナシハ外交ヲ秘密ニスルニ益々無敵  
ヲ加フ是豈ニ外人ノ眼中強テ我大臣ナラシムル所以ニアラザルヤ  
既ニ眼中日本帝國人民ナリ日本政府ト以上ハ匹夫ト異ニ

尚ホ暴慢無禮ヲ加フルヲ憚ラス況ンヤ兵馬ノ擁護ニ後  
ニ備フニ大困ノ使臣ニ於テオヤ従来外交ニ於テ常ニ失敗  
ヲ辱スルニ職ニシテ我者向者力徒ラシク外交ヲ秘密ニシ  
ニ由ラスニハアラス我者向者敵テ之レヲ知ラサルニアラス  
可クモテ之レヲ避クニイテ為ラス今更ニ月一ノ原因ヨリ  
月一ノ失敗ヲ取リタルニ何リヤ夫レ外交ヲ秘密ニスルニ  
常慣アリトモ其ノ條ノ如何ニ拘ラス必ラス之レヲ秘密ニ  
クニ可ラスノ謂ニシアラシマ夫ノ戰闘ニ關係アル問題ノ如ク事  
ノ極ニ機敏活潑ヲ要スル者若クニ事一外國ニ關シ他ノ外國  
トテ之ヲ知ラシムハカラサシ者ノ如キニ或ハ之ヲ秘密ニ付  
スルニ得ルニ其情ヲトセズ然レ今般條約改メ戰闘ニ關係  
アル問題ニテ之ヲ改メ又敵ヲ機敏活潑ヲ要セサレテ修約  
改正

ニ我者有ノ權利ヲ回復セシトスルノ問題アリ敵ヲ秘計  
陰ニ支リ既カントスルカ如キ改畧ヲ要スル問題ニテ之  
改正ニ外國ニ關スルノ問題ニテ諸外國ニ通シテ關係  
アル者ナリ故ニ他ノ外國ニ漏ルルヲ憚ラサレテ然レ  
秘密ニスルノ要ニ即切ニ在ルヤ或ハ之ニカキテ  
発表スル時ニ為テ民心ノ激昂ヲ招キ成功ヲ妨グル  
ニキリ必セズト若シ我政府ニテ不正不道ノ條約  
外國ト締結スルニアルカ或ハ之レヲ秘密ニ付スル  
ニ要アラシク然レハ我政府ニテ初  
キリ今更ニ如キ不道不利ノ決議ヲ為スル  
意アルニモナランヤ我者有ノ權利ヲ回復シ我  
國利民福ヲ増進スルニアリタルニ知ル  
ベシ然ラシ之ヲ公トスルモ何ニシ  
民心ノ激昂ヲ招クノ虞アラシヤ精策  
考ヘ到底之

秘密に及ぶ必要を見出さぬべし

従う外交の人民に秘密にすべし  
然るに専制國の政府  
に於ては或は之を秘密にすべし  
然るに今や政米立憲の制度に倣はんとすべし  
我政府に於ては或は之を  
精策等カ思はす  
精策頭末世上に流布する  
吾子爵の意見書に關するは  
我農商務大臣の如きは條約  
改正を為す利害得失の關する最大なるモノあり  
則ち海關稅の輕  
重内國工業製造の盛衰に關し通商可否の商業盛衰に  
内地雜居の農業工業の關するは如き亦以て然らし  
然るに外務  
獨り任して又事々他方を計らざる豈に策を得ん  
モノナラシヤ  
是、由り之を見れば右前農商務大臣の條約改正の議に子

ルを得たりといふ疑ふ可らざらん  
又聞かざる據  
レハボアソナードに當り決議案の關する意見ヲ司法大臣、陳へ  
らん、大臣<sup>塔</sup>我其事務ニマラス且つ其談判ノ權様ノ如キ單に會  
議筆記ニヨリテ議カニ之ヲ知ルを得ん  
下カキ其意見ヲ却り  
たり於是ボアソナードに慨然として曰く日本大臣何んり勇氣を立  
シヤヤ若し政米ノ政治家ヲラシム必ス奮テ余カ意見ニ全意ヲ表  
シ内閣に向テ大に詰問ス所アラシニ日本大臣何んり勇氣を立  
シヤト司法大臣豈に勇氣ナカラシ  
唯外務部アリ之レヲ專断ニ當り  
大臣に謀るマラサリシカ故に蓋し激しん所アリテ知所冷談  
ナレバ然らば之者ナレバ知レ可ハシ夫し農商務司法大臣ノ如  
キ最モ條約改正ノ議に與レ可キ位置に居んモノナリ然るに為  
ス思は如其他の内閣大臣カ與レ能ハサリシヤ知レハキ、抑今

内閣に政治上責任ヲ分擔スル者ニアランカ何レノ他ノ大臣ニ之レ  
ヲ謀テ凡ハ政議ニ與ルヘキニ當リテ不レニ疎外セラレテ之レニ無  
ク得ス不満足不平ノ心ヲ抱クハ人情ノ常ナリ内閣諸大臣以テ不  
満足不平ヲカランヤ昔英王ウヰリヤム三世ハ當時改定州鈔ヲ  
ノ政治家より王殊ニ外交ニ長シクシテ以テ英國人民ニ其力ス所ニ  
任シヨリト其專斷外務ヲ處センニ當リテ下院ニ之ヲ憤リ時ノ  
宰相ロバトトローエヲ黜ケリルニマスヤ英國人民力信ヲ置キ  
タニ君主ト雖モ尚ホ如此クシヤ一外務大臣カ專斷外務ヲ決ス  
ルニ於テ豈ニ群議ヲ拒カサラシメ先キニ升上仰カ其職ヲ懸レ  
ラレタル如キ又ハ内閣全体力カ為テ動搖シテ其地步墜國ヲフ  
サレカ如キ固ヨリ当然ノ事ナリ外ニハ會議ヲ秘密トシテ  
人民ノ之ヲ知ルヲ許ハサズ人民大ニ不平ヲ抱キ内ニハ一大臣專斷

横暴ヲ決シテ他ノ大臣ニ謀ラズ諸大臣頗ル不満足色アリ上下共  
ニ和セズシテ如何シテ外交ノ全キヲ望ムリ得ニヤ若シ夫レ政府徒  
ラニ會議ヲ秘密ニ附ヤス之レハ内ニ謀リ之レヲ秘シテ示ラハ何ソ又  
今回ノ如キ不利不意ノ決議ヲカスニ至ランヤ人ハ云フモシボア  
ソナート力意見書ヲ提出スルノ力アリヤ日本ノ國權殆ト地  
際ニト精策等ハ時ニ謂ハントス政府若シ徒ラニ變テ秘密ニセ  
スニハ何リ又ボアソナートヲ待タシヤ蓋シ過言ニアラサナリ  
之レヲ要スルニ今回ノ變タリ到底政府ノ失策タルヲ免カレス精策  
等固トヨリ不満足不平ナキ能ハサルナリ然リト雖モ徒ラニ政府ヲ攻  
撃シ其非ヲ鳴ラシテ己ムモノニアラサルナリ蓋シ日本人民ノ今ヤ  
政府ト共ニ同舟遭難ノ危ニ際シタレハナリ其際單リ船師  
ヲ責テ難ク避クニシテ是レ可ラス期セスシテ相濟フハ人情ノ常



ナリ精策ヲ欲スル也政府ヲ助ケテ早ク厄ヲ脱セシト  
スルコトアリ豈ニ他意ケランヤ政府モ又ヨ宜シク心ヲ慮  
フシ氣ヲ平シシ人民ノ言ヲ所リ聞クヘシ且クタル情實  
ニ拘泥シ苟且ノ計略ヲ用ヘテ人民ノ笑ヲ取ルハカラカ  
ルナリ東萊曰ク天下之情固有厚之而薄薄之而厚者不可  
不察也子弟與郷人皆在席觴酒豆肉必先郷人而後子弟豈  
人情固厚於疎而薄於親乎蓋疎則相責親則相恕其待郷人物  
至而情不至所謂厚之而薄者也其子弟物不至而情至所謂  
薄之而厚者也我政府ノ外人ニ於ケル寧ヨ厚キニ過キ人  
民ニ於ケル寧ニ薄キニ過クニハ所謂厚ニ似タル者却テ  
薄ク薄キニ似タル者却テ厚キモリニワラサレシ得ンヤ  
精策者ハ實ニ如ク斯信セントス然ルニ外患危ノ今日ニ

ニ古リ漫リニ人民ヲ疎斥シ之ヲ待ツコト甚ク薄キ者アル  
ニ於テハ精策等或ハ疑フ政府ハ其外形特リ人民ニ薄キニ  
マラス其内情モ又ヨ真ニ薄キ者ニアラサレハ内外共ニ  
薄クシテ一國ノ人民叛セサレハ古来未ダ曾テアラサレナ  
ナリ然リト雖モ人民ト政府トハ元ト一家ノ人ナリ知ラズ  
ニテハハレシヤ言フテ真ナラサレハ可ニ又諺ニ曰ク之ヲ  
ニ謀ラレヨリ之レヲ鄰ニ謀レシヨ鄰ニ謀レヨリハ之  
レヲ家ニ謀レハ是遠キ者思レシテ近キ者智アルヤ云フニ  
アラサレナリ愛情淺キ者其思慮自ラ忽略ニシテ愛情深  
キ者其考慮自ラ諄密ナルヤ云フナリ是レ理勢ノ然ラシム  
ル愛人情ノ自然ナリ譬ハ今四海九州ノ人率然トシテ  
相遇フテ之ニ問フモ答ハス之ヲ叩テ尚不應セサルヤ叩

問再三ニシテ始テ相應スヘシ家人婦子ハ則チ然ラス情義  
ヲ一トシ休戚ヲ均フス豈内隱ス所アリ外飾ル所アラシヤ  
故ニ其誠ヤ真ニ其情亦真ナリ於是途上相通フ尚ホ問ハス  
シテ告ケ叩カスシテ諾リ懇疑惻怛互ニ具情ヲ吐ク歟ナ  
以テ往々利害ノ真ヲ得ル莫クハ精策等實ニ政府ノ情義  
ヲ一ニシ休戚ヲ均フスルモノナリ豈問フテ然シテ後始  
ナラ對ヘ叩テ而シテ始テ應スル者ニ同シカランヤ一朝  
利害ノ相関スル者アリ豈ニ問ハス叩カスルモ之レニ此  
クニモ真ヲ以テ之レニ諾ルニ真ヲ以テセサランヤ精  
策等今實ニ真ヲ以テ政府ニ告ケントス政府豈ニ又モ真  
ヲ以テ精策等ヲ逆セサレ可シヤ夫ノ外國ノ雇顧問ノ  
如ク其知慮或ハ我レニ越スル者アラシ然レトモ彼レカ

我國ヲ愛スル豈ニ吾人ノ愛ニ及ハシヤ且波カ政府ニ告ケ  
ル者自ラ進ニテ告ケタルニアラス問テ始テ告ケタルナ  
リ叩テ而シテ後對ヘルモノトシ其言言前スヘシト是レ  
畢竟顧問ノ任ヲ全フシタルニ過キス吾人ニ之ニ異ナリ付  
テ進テ政府ニ告ケル者ナリ是レ真情ナリ真認ナリ况  
ンヤ外人ノ知慮ヲ藉リテ却テ外國ニ告ケルカ如キハ日本  
ナキナラス者ナルオヤ故ニ政府ハ今ノ際ニ告ケル外人  
ノ知慮ヲ藉ルルヲ要ス且シテ内ニ謀リテ隱ス所ナク飾  
ル所ナキ懇疑惻怛ノ忠告ヲ求ムヘシ精策等今ヤ將  
ニ政府ニ告ケル所アラシトス  
精策等カ政府ニ向テ此無切ニスル所者ハ政府カ一年  
有年ヲ費シテ開キタル四十甲ノ會議ヲ全ク無効ニ帰

其決議決セル改正案ヲ入り抹殺セシキ又是レナリ今  
四十回ノ會議議入キテ徒勞ノ屬セシムル是思ハルカ如  
シト雖モ其議決ノ實施ヨリ生スル大患ヲ思ハレテ顧  
ミルニ是マラサルナリ議決ヲ取消スル固ヨリ容易ノ事  
ニアラズト雖モ之ヲ為スニワラスハ國家ノ存亡又測ルハ  
カラサシキ事ナリ然レモ之ヲ取消スルコト必要ナルモ之ヲ為ス  
能ハズノ理由アラハ亦如何トモスル能ハサル可シ今四場  
合ニ於テ果シテ取消スル能ハサルノ理由アルカ精算書ヲ  
以テ觀シハ直モ諸外國ニ於テ之レヲ拒ムノ理由ナクシテ  
却テ我ニ於テ之カ取消ヲ請求スル充分ノ理由アルモノ  
ト確信ス請フ左ニ其一ニ其第一ニ我日本帝國  
及ビ條約國ノ委員ノ權限如何ヲ案スルニ蓋シ我カ

井上伯カ各公使ト共ニ條約改正會議ニ臨ムル委員ノ資  
格ヲ以テセリト雖モ其果シテ條約改正ヲ完結スルコト  
ノ全權ヲ委任セラレタル者ナリヤ時々吾等ニ要知  
評定スルモノ委任ヲ受ケタル者ナリヤニ上テハ精算  
書之ヲ審ニスルヲ得スト雖モ私ニ案スルニ井上伯及各  
國公使ノ今回敢テ該文件ヲ評決セシカ者ヲ特派  
セラレタル全權委員ニアラザレバ可シ聞ク處々據ヒハ  
アソナードハ吾等ニ案案委員ナリト明言セリト又  
之レヲ証スルニ各國公使ノ既ニ其本國ニ向テ決議案  
ニ調印スルノ特許ヲ請求シタリト云フヲ以テセリト果シ  
テ此請求ヲ以テ實事ナリトセハ以テ各國公使等カ  
該條約案ニ對シテ調印スル權限ヲ有セザリシヲ証

スルニ是ナリ何ナレハ既ニ全權ヲ委任セラシタル者ナラ  
ハ故ラ之レカ特許ヲ請求スルノ必要ナレハナリ況  
ニヤ該草案ノ議決中ニ於テ現ニ各本國政府ノ批准  
ヲ得テ始テ施行スヘキヲ規定シタルヲ以テ見シハ蓋  
々以テ又々委員ノ權限ナル草案ニ草按ヲ詳定スルマ  
ニ止リ該決議ヲ以テ確定ニシラシムルノ全權ヲ委任  
セラレサリシヲ觀ルニ是レハ然ラハ則チ該決議草案  
ハ是より委員間ニ同意ヲ得ルノ草案按ニ過スレテ具  
各本國ノ政府ノ批准ヲ得ル間ニ確定ノ條約ニテナ  
ルナリ果シテ然ラハ之ヲ確定ノ條約ニテラシムルト  
各本國ノ自由ナルヘキハ当然ノ理ニシテ復チ疑フ可  
ラサル也是ヲ取消シ得テ又第一ノ理由トス

第一ニ該決議案ノ確定前即チ各本國政府ノ批准  
ヲ經サル間ニ一方ノ政府ノ任意ニ依リ之ヲ取消シ得ヘキ  
ヤ否ヤヲ按スルニ是一般普通ノ法理ヨリ推考スル時ハ  
燎然タル問題ニシテ固ヨリ之ヲ批准承認スルト否ヤトハ  
各本國政府ノ自由權内ニ在ラ存スルヤ明ナリ何トナシ  
ハ凡ソ契約ハ双方對テ自由任意ノ合同ニ依リテ成  
立スル者ナレハ其来々双方ニ於テ全ク合意ヲ表明セ  
サル間ハ双方何レノ一方ノ意思ヲ以テモ自由ニ取消ス  
コトヲ得ヘキハナリ況ンヤ決議案又レ自ラニ於テ批  
准ノ期限ヲ明セセルニ於テ又況ン國際間ノ條約  
確定スルニ一般普通一私人間ノ契約ニ比スレハ更ニ  
一層ノ鄭重嚴格ヲ要スルニ於テナリ是レ其取消シ

得へキ第ニノ理由トス

第ニニ依リ、以テノ推測ヲ以テ悉皆誤レル者トナシ該決議案ヲ以テ全權委員ノ評定セル確定條約ニシテ各本國ノ批准ヲ得ルハ早ニ儀或エ止マリ其期限ヲ定メテ如キ之早ニ實施期限ノ起生ヲ規定セル止マシ者トセシカ最早何事ノ變更アリトモ之ヲ取消し得ハカラサル若シヤ否ヤヲ按スルニ是レ尚ホ取消し得ヘキノ理由アリト信スルナリ其理由トハ何カ他ナシ委員等集シテ全權委員ノ評決セルモノトモ虽モ若シ其權限ヲ濫用し不吉不正ノ決議ヲ為シ以テ國權ヲ枉ケ民福ヲ害ス可キノ變更アリトスレハ是レ權限ヲ濫用シタル者ナリ即チ權限ニ權限外ノ變更ヲ為シタルモノナリ

今該決議按ナリト云クテ視ルニ委員ハ我日本國ニ不利ナル決議ヲ為シタルモノナリ真ニ不吉ノ評決ヲ為シタルモノナリ是レ豈ニ權限外ノ事ヲ為シタルモノニ非スヤ凡ソ代理者ノ權限外ニ為シタル處置ハ何時ニテモ委任者ニ之ヲ取消スル得ヘキヲ權限アル事一般ノ法理ナリ故ニ今一步ヲ讓リテ既ニ確定セル條約ナリトスルモ尚ホ且ツ其理由ヲ以テ取消し得ヘシト推信シテ疑ハサルナリ之レヲ第ニノ理由トス

第ニニ我政府ハ右ノ外尚ホ他ニ之カ取消ヲ要求し得ヘキ一大理由ノ存スルヲ信スルナリ何カ日本國人民多數ノ輿論之ヲ宏シサレテ如何セシ抑モ政府ハ國ノ代表者ナリト虽モ其意思國民多數ノ輿論

二一致セザルコトアリ此秋、きりきり三者ノ位置、  
凡そ外國政府ニ果シテ孰シカ以テ其國ノ真正ナル  
其望ト見做スヘキヤ問ハスレテ國民多数輿論  
據ルノ至キナルヲ知ル況ニヤカ路者自ラ其罪ヲ  
謝シ國民ノ輿論ヲ認メスレバ於テヤ之ヲ以テ各  
國政府、取消ヲ請求スルニ於テハ何ヲ以テ之ヲ拒ムヲ得  
ルヤ之ヲ取消ヲ請求スル筈四ノ理由トス  
如斯ク我ニ取消ヲ請求スル理由アリ權利アリト知  
ラハ政府ハ何故、之ヲ断行セザルヤ此理由ト權利ヲ有  
シナカラ敢テ之ヲ請求セズ僅ニ中止ノ手段ニ依リテ  
一時否論ヲ避ケントスルカ如キ苟且ノ計ニ出テリ  
ハ抑モ我弱所ヲ外國ニ示ス者ニアラザルカ政府或

ハ之ヲ認リタル當局者一人ヲ點シテ該會議中  
止シムルヲ以テ其責ヲ免レタリト思惟セシモ知ル可ラスト  
雖モ之ヲ全ク取消スニアラズニ未タ以テ政府ハ人民  
ニ對シ其責ヲ免シテト云フヲ得ザルナリ然ルニ改  
府ハ唯ク之ヲ取消ヲ勉メサルノニナラズ固クカ如ク  
近日各々各國政府ニ寄セテ我カ人民愚昧ニシテ  
到底今回ノ會議ヲ完結スル能ハス故ニ一時之ヲ中  
止スルモ必ス他日ヲ得テ既決ノ條約案ヲ実行スル  
ノ意ヲ示シテリト嗟呼是尙何変クヤ政府既ニ人民  
愚昧ニシテ到底條約ノ改正ヲ遂ク不能ハザルヲ知ラ  
ハ何故、明治初年熱心以テ変メ、當リタルヤ人民ノ  
智識既ニ開達セルコトヲ認メテハコソ數々會議

議ヲ促シ漸ク人テ曰ニ至リタル者ナラシ然レ今已カ失策ヲ  
敵ハシカ為メロク人民ノ愚昧ニ藉リテ中止ノ理由ト  
スルカ如キ卑劣モ亦ク甚クシカラスヤ或ハ卑劣モ  
亦ク甚クシカラスヤ或ハ以通知ル彼ニ與フルニ取  
消リ拒絶スルノ純粋リ以テシタル者ノ如ク皮想ス  
ル者アル可シト果モ畢竟是中止ノ理由ヲ報道シ  
タル者ニ過ス既決ノ條項ヲ取消スノ効力ナキヤ明  
ナリ然レハ則テ何ソ故ラ之ニ實行ヲ復言スルノ要  
アラシヤ否ナ設令政府ハ幾百回復言スルモ更  
ニ是ノ効力ヲ該議極ニ附加スル能ハサルナリ何リ又  
之ヲ意トスルニ足ランヤ我政府トシテ若シ輿論ニ  
依リ取消ノ必要ヲ覺ラハ以テ等ノ變ニ拘泥セズ

速ニ之ヲ断行スハシ我ニ心當リ理由アリテ我當有ノ  
権利ヲ要求スルニ何リ躊躇スル所カアル政府自ラ為  
シタル失策ハ自ラ之ヲ處理スルヲ至ラトス政府輿  
論ニ顧ミテ早ク之ヲ理スルノ方略ヲ運ラスハシ然ラ  
スレハ民心ノ激昂益々甚クシキヲ致シ政府ノ前途亦  
測ル可ラサル者アラントス今ヤ精算不利不當ナル議  
決ヲ取消シ政府ニ望ムニ是レ急ナリ又他ヲ云フニ皇  
アウザンナリ若シ政府輿論ニ順フテ之ヲ断行セハ精  
算等更ニ善後ノ策ヲ獻スルニ憚ラサルハシ惟ニ元  
閣下葛岡莞ノ言論ヲ細ルニ任ニアリ幸ニ精算等  
ノ微哀ヲ宛示シ之レヲ  
陛下ニ執奏シ精算等ヲシテ國家ニ忠ナルノ民々

ラシノミ頓首謹言

明治廿年第十一月

新潟縣下越後國北蒲原郡

新發田本村第三十八番地士族

代言人 富田精策印

三十一年三月

同県全國同郡

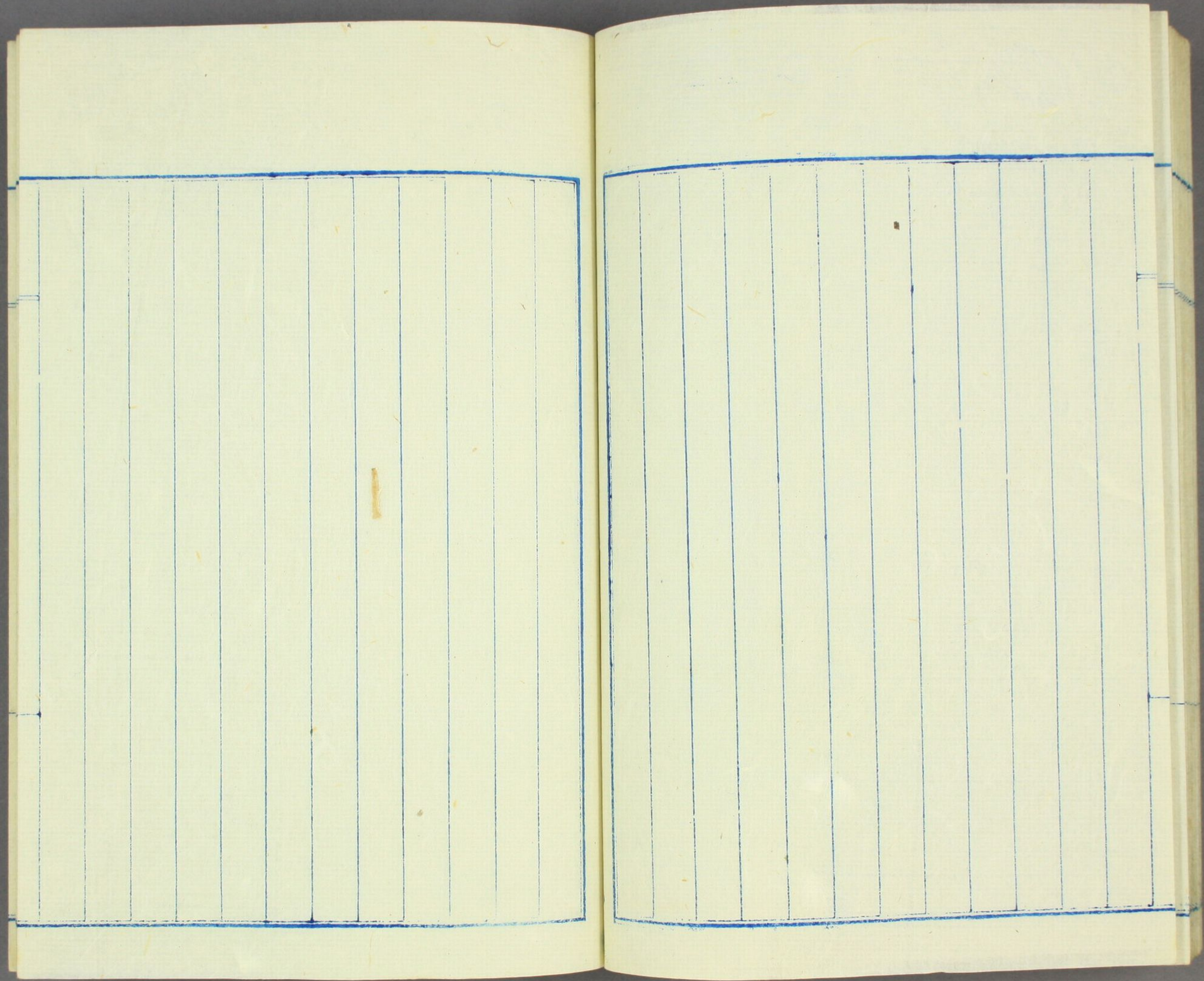
新發田町第八百廿六番地平民農

相馬一郎印

二十九年六月

右ノ建シハ上ノ地先永次多ク少シ助事  
トシテ其博業作シヨシヨシ





以下全て  
白紙

